

国立民族学博物館の収蔵品 ④6

麦わら帽子(かんかん帽)



写真 かんかん帽。三重県の農家で1950年頃に使用されていたもの



図 1897(明治30)年発行の資料より、河合英忠(1875-1921)筆(「身装画像データベース」より転載)

夏は暑さをしのぐために帽子を身につける機会が増える季節である。強い日射しから身をまもる道具として、最近では遮光性にすぐれた合成素材でつくられた日傘を利用する人の姿が目立つようになったが、身近な植物素材で編まれた昔ながらの「麦わら帽子」は、その軽さと風通しの良さ、さらに遮熱性とを兼ね備えた最も手軽で実用的なものであろう。

国立民族学博物館(みんぱく)が所蔵する資料にも麦わら帽子がいくつもある。写真の「かんかん帽」もそのひとつであり、明治から大正を経て昭和期に至るまで、夏の定番アイテムとして人々に広く親しまれた種類の帽子である。この帽子は幅広の麦わらを編んでつくられるが、叩くとカンカンと音がするほどに固く成形するのが特徴で、そこからこの名が付いたともいわれている。

かんかん帽は十九世紀後半から二十世紀にかけて世界各地で流行した。英語では「ボーター(Boater)」と呼ばれるこの帽子が日本に伝わって以降、どの程度普及し、またどのように用いられていたのか、その様子がわかるデータベースがみんぱくで公開されている。「近代日本の身装文化」『身装画像データベース』

ス』(shinsou.minpaku.ac.jp)である。明治維新以降、昭和二十年頃までの期間を対象に、人々のふるまいや装いの様子がわかる新聞の挿絵や写真、絵画などを集めた研究資料データベースである。そこで「カンカン帽」を検索すると、図の例のようにこの帽子を男性が和装とともに着用している様子を見ることが出来る。また都市対抗野球の観戦風景には帽子の流行が顕著にあらわれている。ほぼ全ての観客が付き帽を着用している壮観な写真であるが、そのうち相当数がかんかん帽である。当時の夏場の着用率の高さがよくわかる例であろう。

帽子は使用地域の時代や文化の中で社会的な記号としての意味を持つ場合も多い。ファッションから実用までその様式の幅はたいへん広く、素材や形も様々である。興味のある方は、『月刊みんぱく』二〇一四年七月号の記事「集めてみました世界の〇〇—帽子編」も参考にしていただければと思う。道具や日用品をテーマに世界各地の資料を集めた誌上のミニ企画展コーナーであるが、この回では麦わら帽子のほかにも多種多様な帽子を紹介している。ウェブサイトでも公開しているので、こちらもぜひご覧いただければ幸いです。

(丸川雄三)



1 『身装画像データベース』から「カンカン帽」の検索結果



2 「炎熱を吹つ飛すこの大観衆」『東京日日新聞』(昭和5年8月8日3面)



3 「集めてみました世界の〇〇—帽子編」